

## P-009

## 親子の絆づくりプログラム「赤ちゃんがきた！」の子育てへの影響

鴨下 加代、土路生 明美、伊藤 良子、  
加藤 裕子

県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科看護学コース

## 【目的】

生後2～5ヶ月の第1子を育てる母親が子どもと共に参加する親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”(BP:Baby Program)の受講者が捉えたBPの子育てへの効果を明らかにする。

## 【方法】

A県内でBPを受講した母親(受講群)とBPを受講歴のない乳幼児の保護者(対照群)を対象とし、現在の地域活動(町内会等)の参加状況、相談相手の有無、子育て満足度、受講群のみBPがその後の子育てに役立ったかについてWEBアンケート調査を実施した。調査期間は2022年11月～12月とした。BP受講者にはBP実施団体の協力を受け調査依頼を郵送し、子育て中の保護者へは子育て支援センターへの調査依頼の掲示と子育てメルマガ登録者にメール案内をした。分析は記述統計値を算出し、項目の関連はカイ二乗検定(有意水準5%未満)を行なった。本調査は、所属機関の研究倫理委員会の承認を得て県立広島大学重点研究事業地域課題解決研究として実施した。

## 【結果】

回答者は、受講群194名、対照群は423名で、BPを受けた子どもの調査時の年齢は0～10歳だった。「子育てを家族で助け合っている(4,5選択)」は、受講群82.0%、対照群69.7%、「子育て生活に満足(4,5選択)」は、受講群67.5%、対照群48.7%で、それぞれ受講群が有意に高かった。「地域活動に参加している」のは、受講群38.7%、対照群41.8%で2群間に有意差は認めなかった。「BP参加によりその後の子育てに役立ったこと(自由記載)」では、「考え方や今後の子育ての目標が明確になった」、「夫や子どもとの関わり方を知った」、「地域の支援者(保健師、児童館職員、保育士等)と顔なじみになった」、「BP受講をきっかけに外に出る機会が増えた」、「困った時は相談しようと考えられるようになった」等があった。

## 【考察】

受講群は「子育てを家族で助け合っている」、「子育て生活に満足している」の項目で有意に高かった。BP受講のみの影響とはいえないが、BP受講はパートナーや子どもとの関わり方を相談する機会や自分らしい育児をするきっかけになり、それらに影響した可能性が考えられた。また、A県では公民館や子育て支援センター等でのBP開催が多いが、対照群の方が地域活動参加状況は高かった。ただ、受講群の自由記載には、「地域の子育て支援者と顔なじみになる」等があり、BP受講は乳児の母親が地域の資源や支援を活用した子育てを始めるきっかけの1つになると考えられた。

## P-010

## 幼児のレジリエンスに対する保育者の認識に関する研究

## —保育経験年数に着目した検討—

劉 梅、七木田 敦

広島大学人間社会科学部研究科

## 【目的】

本研究は幼児のレジリエンスという概念とその育成について、保育者の認識の現状を明らかにし、初任保育者とベテラン保育者の比較を通して保育経験年数による認識の差異を分析することを目的とした。

## 【方法】

幼稚園や保育所に勤務する保育者128人を対象に質問紙調査を行った。

質問紙の冒頭でレジリエンスの定義を説明したうえで以下の内容を尋ねた。

- ・属性：4項目(性別・年齢・保育経験年数・担当クラス)
  - ・幼児のレジリエンスへの関心度について：1項目
  - ・レジリエンスのコア概念である「困難」に関する保育者の認識：18項目
  - ・レジリエンスのコア概念である「適応」に関する保育者の認識：7項目
  - ・幼児のレジリエンスを育むための取り組みについて：7項目
- 本研究における解析はIBMのSPSSver.26を用い、主に2種の解析を行った。

まず、保育における幼児のレジリエンスへの関心度と保育者の属性との相関関係を検討するため、Spearmanの順位相関係数を用いて相関分析を行った。また、幼児のレジリエンスについて初任保育者とベテラン保育者の認識の差異を検討するため、 $\chi^2$ 検定を行った。

## 【結果と考察】

1. 保育者が保育経験年数を重ねるほど、保育における幼児のレジリエンスへの関心度が高いことが明らかになった。幼児のレジリエンスへの関心度が保育者の知識の構造化と子ども理解の深化につながるものと考えられる。
2. 初任保育者は幼児間の葛藤場面に注目しているのに対し、ベテラン保育者は「対保育者」や「対物」などより多様な場面で幼児の困りごとに注意を払うようになることが示唆された。幼児が困っている状態について、行動化される反応には経験年数に関係なく気づかさずやすく、身体化される反応が心理的葛藤につながっている可能性を意識するには、保育経験の蓄積が必要である。
3. 保育者は幼児が葛藤的な出来事に遭遇した場合、適応に至るための「自己調整」を、幼児のレジリエンスを構成する重要な要因として捉えていることが示唆された。また、幼児のレジリエンスを育むために、初任保育者よりベテラン保育者のほうが家庭と園の相互支援を積極的に取り組んでおり、トラブル解決のために集団化を促すよりも、幼児のトラブルなどの実体験やリスクに伴う遊びを大切にしている傾向があった。